

## 編集委員が選んだ本

『中国侵略の証言者たち—「認罪」の記録を読む』

吉田裕他編 / 岩波新書 / 2010年4月 / 700円 (税別)

中国における戦犯裁判に対する方針はきわめて人道的であった。中国 정부는、戦犯に対する徹底的な教育によって、その「認罪」を引き出し、厳罰を望む被害民衆を説得しながら、寛大な処遇・刑罰を与えたのである。死刑判決は一人も出ず、ほとんどは刑期満了前に釈放され、日本に帰国している。

2005年、この時に起訴された45名全員の供述書が中国で刊行されたが、本書はそれをベースに日本が中国で行った侵略行為の具体例が叙述されている。「満州国」でのアヘン専売や、華北における「三光作戦」、なかでも毒ガス戦、細菌戦、日本軍による慰安所の設置と性暴力の実態などが、戦犯の証言をもとに明らかにされている。

元戦犯の多くは、帰国後、中国帰還者連絡会(中帰連)を組織して、中国で犯した罪を証言する活動を行ってきたが、今、その活動が最後のピークを迎えようとしている。本書を読んで、今更ではあるが、中帰連の人々の真摯な生き方に胸を打たれた。

『これだけは知っておきたい 日本と朝鮮の100年史』  
和田春樹 / 平凡社新書 / 2010年12月 / 780円 (税別)

韓国強制併合100年の昨年、さまざまな本が出版されたが、本書は、「100年史」と銘うっているように、併合後の100年間の歴史を通覧しているところに最大の特色がある。特に戦後北朝鮮の動向に関わる記述は、旧ソ連や北朝鮮の史料を直接見る機会があった、筆者ならではの独特の視点で描かれている。

例えば、1994年に金日成が死亡し、金正日が後継者になるが、これは親から子への単純な権力継承ではなかったと指摘している。金正日は、すでに70年代後半から、独特の国家社会主義建設の演出者として、実質的に北朝鮮を動かしてきたというのである。

また、小泉元首相のもとに進められた日朝国交交渉に関しては、日朝が国交正常化の方向へ進むことが重要であり、核の問題でも米朝関係を日本が仲介して解決の方向へ向かわせることができると述べている。傾聴に値する議論である。

『失業しても幸せでいられる国』

都留民子 / 日本機関紙出版センター / 2010年10月 / 1238円 (税別)

えっ? という題名だが、フランスの現状について、インタビュー形式でわかりやすい。

失業者が長期のバカンスに出かけ、出生率はヨーロッパで一番高い。学費も医療費も無料…。

どこかの国で最近“政権交代”が行われたが、その背景には、オルタナティブを求める意識があったのではないか。オルタナティブのアイデアが満載された本。

『街場のメディア論』

内田樹 / 光文社 / 2010年8月 / 740円 (税別)

最近、マス・メディアの報道が、一方的で、掘り下げに乏しいものが多すぎるのではないだろうか…などと感じていた。そこに、示唆に富んだ書物が登場した。

「(テレビの中でニュースキャスターが言う)『こんなことが許されていいんでしょうか』という常套句がどうしても我慢できない」「技巧されたイノセンスに僕はどうも耐えられない」「おのれの無知や無能を言い立てて、まず『免責特権』を確保し、その上で、『被害者』の立場から、出来事について勝手なコメントをする」「『患者さま』という呼称を採用するようになってから、病院の中でいくつが際立った変化が起きたそうです。」

医療や教育の現場に、「市場原理主義」がもたれ、「患者さま」や生徒の保護者の一部が「消費者」としてクレイマー化し、医療崩壊や教育崩壊にマス・メディアが無意識のうちに加担した等、鋭い指摘がつづく。そこから再生の方向も、みえてくるのではないだろうか。

『パンとベン 社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』

黒岩比佐子著 / 講談社 / 2010年10月 / 2400円 (税別)

近代日本史で社会主義思想を扱う場合、帝国主義戦争とともに資本主義が「発展」し、その「影」の開閉策として扱うことが多いだろう。また、日露戦争に反対した「平民社」のような形でも扱われる。「幸徳秋水」「安部磯雄」「片山潜」等とともに、教科書にもチラッと名前が出てくる「堺利彦」。幸徳は大逆事件で死刑になったが、このとき堺が死刑にならなかったのは、1908年6月の「赤旗事件」で監獄の中にいたから——こんなエピソードをはじめ、著者は、社会主義者で投獄された第1号、女性解放運動に取り組んだフェミニスト、海外文学の紹介者で翻訳の名手、言文一致体の推進者、平易明快巧妙な文章の達人、当初は日本共産党創立に参加するが、のちに共産党とは別の無産政党的組織化をめざした、軍人に暗殺されかけ、関東大震災では憲兵隊に命を狙われた、1929年2月の東京市議員選挙でトップ当選した、1931年7月に、バラバラだった無産政党的の統一戦線となった全国労農大衆党の顧問となった、などを紹介する。

著書の核心は、堺が大逆事件後の1910年12月に、編集プロダクションや翻訳エージェンシーの元祖と言える「売文社」を開業したことから、1919年3月に解散するまでの時期である。これは、「(社会主義の)冬の時代」だった1910年代に、平和と平等な社会をめざす運動を灯し続けるための苦肉の策だった…。過酷な当時の風潮にあって、こんなにユニークに生きた「人間・堺利彦」を、ぜひ授業でも紹介したくなる。惜しむらくは、1958年生まれ黒岩氏が昨年11月に急逝され、この続編を読めなくなってしまったことである。

定価 210円 (本体200円) 編修・発行 実教出版株式会社 代表者 戸塚 雄次

2011年2月3日 印刷 発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5 Tel.03-3238-7777

2011年2月10日 発行

<http://www.jikkyo.co.jp/>